「男、突っ走る！」

第43回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（20）　名古屋芸術専門学校２年生

福沢　瑞枝（20）　名古屋芸術専門学校２年生

加藤　直也（20）　名古屋芸術専門学校２年生

大久保　正樹（24）　名古屋芸術専門学校２年生

船倉　篤志（20）　名古屋芸術専門学校２年生

奥村　裕司（21）　名古屋芸術専門学校２年生

山口　拓海（20）　名古屋芸術専門学校２年生

安永　和也（20）　名古屋芸術専門学校２年生

本部　明美（19）　名古屋カフェ調理専門学校１年生

鈴島　孝雄（53）　名古屋芸術専門学校入学事務局長

吉野　茉由（26）　名古屋芸術専門学校入学事務局員

藤野　真弓（20）　中央高校元生徒（写真）

1

名古屋芸術専門学校・表

『学園祭』の看板が立てられており、来場客の行き交いが激しい。

2

同・８階・廊下

お化け屋敷の設営がされており、薄暗くなっている。

学生たちと共に、和也が並んでいる来場客の受付対応をしている。

和也「順番にご案内しますので、少々お待ちください」

3

同・同・８０１教室

学生たちの控え室兼荷物置き場。

雅也と拓海がお化けのメイクをしている――裕司と篤志が、それぞれメイクを手伝っている。

篤志「ぐっち、目の周りもう少し黒くしたらどうかな？」

拓海「（置き鏡を見て）やっぱり、ちょっと

薄いかな（とメイクを直す）」
裕司「うっちー、傷口もう一つ増やそうか？」
雅也「ありがと、お願いします」
裕司、雅也にメイクをする――と、ノック音がして、瑞枝が入ってくる。
瑞枝「みんな、おつかれ」
裕司「みずちゃん」
瑞枝「（袋を渡して）はい、みんなに差し入れ。公園の出店から、適当に買ってきたから、良かったら食べて」
篤志「ありがとう」
瑞枝「うっちーもぐっちも、去年よりバージョンアップしてるね」
篤志「やっすーのこだわりなんだよ。今年はメイクに力入れたいって」
瑞枝「やっすーって、女子力高いよね。私よりあるんじゃないかな」
雅也「それは言えてるかも」
瑞枝「おい」
雅也「冗談よ」

裕司「そういえば、インターンもうすぐ始まるんじゃなかったっけ？」
瑞枝「うん、来週から。三ヶ月東京だから、こっちに戻ってくるのは九月かな」
雅也「加藤もみずちゃんもいないんじゃ、四階の廊下が静かになっちゃうね」
瑞枝「そんなことないって」
と、和也が入ってくると、
和也「お二人さん、メイクのほうはＯＫ？」
雅也「ばっちし」
拓海「ＯＫ」

3

同・同・プレゼンテーションルーム
薄暗くなっており、雅也、拓海などお化け役の学生がスタンバイをしている
――ドアが開き、和也が顔を出すと、
和也「吉野さん、入りまーす」
一同「はーい」
雅也「よし、思い切りやってやるぞ」
と、吉野が客として入ってくる――歩

いていくと、随所からお化け役の学生が出てきて脅かす。悲鳴を上げる吉野。

4　同・同・８０１教室

瑞枝、篤志、裕司が談笑している――吉野の悲鳴が聞こえてくる。

篤志「めっちゃ良いリアクションするな、吉野さん」

裕司「こっちまで声聞こえてくるって、相当だぞ」

瑞枝「そうだね」

5　同・同・廊下

吉野が放心状態のような顔で出てくる――迎える和也。

和也「どうでした？」

吉野「怖すぎる……」

和也「去年より、バージョンアップしてますから」

吉野「それはすぐ分かった」

和也「宣伝よろしくお願いします」
吉野「任せといて」
和也「明日も来てもらって良いですよ」
吉野「絶対嫌ッ」

6　同・全景（夜）

7　同・８階・８０１教室

学生たちが片付けをしている――電卓を撃ちながら会計作業をしている雅也。
ドアが開き、和也が入ってくる。

和也「プレゼンルームの片づけ終わったよ。
（と雅也に）どう、会計のほうは？」
雅也「ちゃんと黒字。利益出てた」
和也「おお、良かった」
と、拍手をする――他の学生たちもつられて拍手をする。
雅也「お疲れ様だったね、やっすー」
和也「うっちーこそ、忙しい中ありがとう」
雅也「やっすーだって。準備の時から、おん

ぶにだっこでごめんね。それに、おっくーやあつぽんやぐっちにも、どれだけ助けられたか」

和也「そうだね。あの三人には、頭が上がらない。支えてもらったから、ここまで来れた」

雅也「三人は？」

和也「今、屋上行ってる」

雅也「あ、打ち上げの日程も決めないとね」

和也「お店もね」

雅也「うん」

8　同・屋上

裕司が煙草を吸っている――傍らでジュースを飲んでいる篤志と拓海。

篤志「学園祭終わったから、ゲーム企画のほうにそろそろ専念するか」

裕司「そうだな。ゲームショーの出店だってあるし、本格始動しないとな」

拓海「俺も、ゲーム企画に出すイラストの準

備と、ポートフォリオ作りに時間割く」
篤志「学園祭企画に携わるのは、今年が最後だろうな」
裕司「来年は就活で、それどころじゃなくなるだろうし」
篤志「だよなぁ」
拓海「来年は、いち来場客として楽しむか」
裕司「だな。去年も今年も、来場客としてのんびりはできなかったから、ラストイヤーは何も考えずに楽しむのも良いかもな」
篤志「今年もお化け屋敷できて良かったよ。やっすーもうっちーも頑張ってくれたし」
拓海「あの二人だから、俺も楽しくできた」
篤志「俺も」
裕太「俺もだ」
三人そろって、夜空を見上げる。

9　名古屋駅（数日後）

スーツケースを持った直也が待っている――荷物を持った瑞枝がやってくる。

瑞枝「ごめん、お待たせ」
直也「よし、行くか」
瑞枝「いよいよ始まるね、インターンが」
直也「ああ」
と、新幹線改札口へ入っていく。

10　名古屋芸術専門学校・４階・廊下

雅也、篤志、裕司、拓海がそれぞれ弁当を食べている。
拓海「今頃、東京着いた頃かな」
雅也「午前中の新幹線で名古屋出発するって言ってたから、そろそろ着いた頃なんじゃないかな」
裕司「映像科二人いないだけで、こんな静かになるもんかな」
篤志「一年生と比べたら、あまり学校に来なくなった同期だって何人もいるけど、やっぱりいつも顔合わせてるメンバーは、大体残ってるよね」
雅也「うちらの代は一人一人の個性が強すぎ

るぐらいだもん、一人で二人分ぐらいのパワー持ってるみたいなもんじゃん」
拓海「うっちーは三人分でしょ」
雅也「そんなことないって。俺で三人分だったら、みんなは四人分とか五人分じゃないの？」
裕司・篤志・拓海「いやいやいやいや」
雅也「何で揃って否定してるんだよ」
拓海「だって、俺らなんてそんな何人分もの個性持ってないもん」
雅也「よく言うよ」
と、エレベーターが開き、正樹が出てくる。
正樹「あ、木内。ドラマの役者だけど、四人役者揃ったよ」
雅也「そう、良かった」
正樹「あとで写真と情報、メールで送っとくわ」
雅也「ありがと」
４０１教室に入っていく正樹。

篤志「そっか。今うっちー、大久保と一緒にドラマ企画やってるんだっけ？」
雅也「そうそう。脚本はね、ある程度できて、後はちょっとの修正をするだけ。大変だったよ、直し入れるの」
篤志「キャストはどうしてるの？」
雅也「大久保の知り合い経由で集めてもらった。俺にはそんな伝手ないしね」
篤志「へえ」
裕司「どういうストーリーなの？」
雅也「（小声で）恋愛もの」
裕司「何で小声なんだよ」
拓海「うっちーが、恋愛もの？」
篤志「万年筆の話を書いたあのうっちーが、恋愛脚本書いた？」
雅也「そう言われるから、小声で話したんでしょうが。俺はどちらかと言えば、万年筆の話のほうが得意ジャンルだし」
拓海「あれでしょ。家族の百年を見てきた万年筆の話」

雅也「よく覚えてるね。てか、何でぐっちが知ってるの」
拓海「あつぽんから借りた」
篤志「読ませてやろうと思って」
雅也「広めていただいて、ありがとう」
と、和也が階段を上ってくると、
和也「お、ちょうどみんな揃ってた。お化け屋敷の打ち上げ、来週の土曜日に決まったので、よろしく。あとで、グループＬＩＮＥに詳細送っときます」
一同「りょーかい」
雅也「結局やっすーに任せちゃって、ごめんね」
和也「大丈夫だって」
裕司「そうだ。全員で集まる前に、お昼から俺たちだけでカラオケ行かない？」
雅也「良いね」
篤志「久しぶりにみんなで歌うか」
拓也「二年生になってから、みんなで遊ぶ時間なんてなかったもんな」

和也「よし、じゃあよろしく。思い切り楽しもう」

一同「はーい」

11　同・1階・ロビー（翌週）

裕司、篤志、和也が待っている――エレベーターが開き、雅也と拓海が出てくる。

雅也「ごめん、お待たせしました」

拓海「俺たち二人とも作業してたら、すっかり集合時間ギリギリになっちゃってた」

篤志「土曜日までよくやるね」

雅也「やっぱり常に創作活動してないとね」

裕司「よし、揃ったことだし、行くか」

和也「よし、出発」

12　カラオケボックス・一室

雅也が扇子片手に絵かを歌っている――拍手や合いの手を入れている和也、裕司、篤志、拓海。

13

居酒屋（夜）

打ち上げの席で、それぞれ談笑しながら食事をしている雅也、和也、裕司、篤志、拓海、その他の学生たち。

14

東京・アパート・一室（夜）

直也がパソコンで、オンラインゲームをしている。

15

同・マンション・一室（夜）

瑞枝が野菜を切って自炊をしている。

16

名古屋芸術専門学校・全景（数日後）

17

同・４階・４０２教室

パソコンでゲーム制作やプログラミングなどをしている裕司、篤志、和也、拓海――ドアが開き、雅也が入ってくる。

雅也「ねえねえ。ロゴマーク、どっちが良いと思う？」

と、『誓います。』と書かれたパターンAとパターンBの印刷物を一同に見せる。

雅也「俺から見て左がA、右がB。せーので答えてほしい」

篤志「分かった」

和也「良いよ」

裕司「任せろ」

拓海「OK」

雅也「じゃあ、いくよ。せーの……」

一同「Bッ！」

雅也「みんなBかぁ」

篤志「あれ、まさかうっちー的には、Aだった感じ？」

雅也「まあね。でもこういうのって、自分の意見よりかは第三者の意見のほうが確かだもんね。ありがとう（と出ていく）」

18　同・同・４０１教室～廊下

『誓います。』のロゴのＡ案とＢ案の紙を見ている雅也と正樹。

正樹「やっぱり、Ｂ案意見が多かっただろ」

雅也「うん」

正樹「だから言っただろ」

雅也「やっぱり俺の考えって、みんなと違うんだろうな」

正樹「まあ、それも個性の一つってことだよ」

と、正樹のスマホに通知が来る。

正樹「（画面を見て）マジか……」

雅也「どうしたの？」

正樹「ヒロインの友人役の女優さん、事務所のスケジュール調整ができなかったって」

雅也「え……？」

正樹「別の女優さん、頼むしかないな」

雅也「こういう時、どうするの？」

正樹「主役の奴に、候補の人いないか頼んでみるわ」

雅也「演者のスケジュール次第では、脚本も

修正したほうが良いのかな？」
正樹「いや、セリフ覚えてもらったり、準備してもらったりすること考えると、大きな変更はしないほうが良いな。木内は、台本の製本作業進めてくれ」
雅也「分かった」
正樹「あ、キャストページは、役名だけ入れて、演者の部分はまだ空欄で大丈夫だから」
雅也「りょーかい」
正樹「ちょっと一服してくる（と出ていく）」
雅也「いってらっしゃい」
と、パソコンで作業を始める――エレベーターが開き、吉野が出てくると、４０１教室に入ってくる。
吉野「木内君、お疲れ」
雅也「あ、吉野さん。お疲れ様です」
吉野「最近、忙しい？」
雅也「大久保と一緒にドラマ作る企画進めて、その準備に追われてます」
吉野「夏休みに、高校生対象のキャンプがあ

るんだけど、去年同様、またスタッフお願いできないかなと思って」

雅也「ぜひッ！　もうそんな時期ですか」

吉野「姉妹校の動物専門学校とカフェ調理専門学校と合同のスタッフ説明会やるから、出席してね。日付と場所は、またメールで連絡するから」

雅也「分かりました。今年も盛り上げますね」

吉野「よろしく」

笑顔で頷く雅也。

19　同・9階・図書室

雅也、和也、その他学生たちが揃っている――カフェ調理専門学校の1年生・本部明美（19　）も、その中にいる。

司会進行をしている鈴島と吉野。それぞれ学生たちが自己紹介をしている。

明美、起立すると、

明美「名古屋カフェ調理専門学校一年の本部

明美です。先輩たちと一緒に高校生を楽しませていきたいと思います。よろしくお願いします」

拍手をする一同。

鈴島「カフェ調理専門学校は以上ですね」

吉野「じゃあ次、名古屋芸術専門学校の皆さん、お願いします」

和也、起立すると、

和也「名古屋芸術専門学校ゲームプログラマー専攻二年の安永和也です。専攻がゲーム系なので、みんなを楽しませていけたらと思っています。よろしくお願いします」

拍手をする一同――雅也、起立すると、

雅也「名古屋芸術専門学校シナリオライター専攻二年の木内雅也です。学生スタッフも、高校生の皆さんも楽しく盛り上げていきたいと思います。よろしくお願いします」

拍手をする一同。

和也「（一同に）うちの学校のいじられキャラ兼まじめポジションのうっちーをよろし

くお願いします」
雅也「余計なこと言わなくて良いんだよ」
和也「いやいや、こういう時こそ、うっちーの本領発揮だと思って」
雅也「順番に出していくから大丈夫なの」
笑っている学生たち――苦笑している雅也。

20　同・４階・廊下～４０１教室
雅也と和也が、エレベーターから出てくる。
雅也「変に印象残っちゃったじゃん」
和也「それがうっちーなんだから、良かったじゃん。おいしいと思ってるくせに」
雅也「まあね」
和也「もう少し作業しますか」
雅也「そうだね」
和也「じゃ、おつかれ」
雅也「おつかれ」
と、４０２教室に入る和也と４０１教

室に入る雅也――正樹が既に４０１教室でパソコン作業をしている。

正樹「あ、木内。見つかったよ、代役の女優」

雅也「ホント？　それは良かった」

正樹「主役やる俺の大学時代の同級生の読者モデル仲間だ。（と書類を見せて）これが、その人の写真とプロフィール」

雅也「ありがとう。（と書類を見て）えッ……うそッ……？」

書類に載っているのは、雅也の高校時代の同級生・藤野真弓である。

正樹「どうした？」

雅也「この人、俺の高校の同級生」

正樹「マジかッ……？　そんな偶然ある？」

雅也「世間って、狭いんだね」

正樹「にしても、狭すぎだろ」

雅也「まさか、真弓さんが……」

唖然と書類を見ている雅也。

つづく